北から南から

地域防災の取組を学ぶ 九州大学の実践型防災教育の紹介

福岡県 九州大学大学院工学研究院環境社会部門
助教 西山 浩司

1 はじめに

災害の危険が差し迫っている時、自分、家族、地域の人たちの命を守るために何ができるか？　災害が発生した時、人命救助のために何ができるか？　九州大学の基幹教育集中講義の「地域を守る災害と防災の基礎知識」は、大学生にそのような状況を疑似体験してもらうことを目的として、糸島市消防本部、福岡管区気象台、糸島市防災士会、地域の人たちとの共同で実施しています。

同講義は、救命講習（胸骨圧迫、ＡＥＤ）、救助訓練、消火訓練、ハザードマップ散歩と災害図上訓練（Disaster Image Game：ＤＩＧ）、気象及び災害の講習、タイムラインを考えて災害に備える大雨防災ワークショップ、地域の人たちと一緒に参加する避難訓練などで構成され、実践型の内容になっています。ここでは、地域防災の取組に適したハザードマップ散歩と災害図上訓練の様子を紹介します。

2 地域を歩き、身近に潜む災害の危険を知る

自分達の住む地域で災害が起こった時、起きそうな時、どうやって安全を確保するのがいいかを考える授業の一環として、福岡管区気象台と糸島防災士会の協力の下で、ハザードマップ散歩と災害図上訓練を実施しています。その取組では、地域のハザードマップを見て、災害の危険性を認識するところから始めます。ハザードマップには、避難場所や土砂災害危険区域、浸水域などの危険箇所が記載されており、災害時の避難ルートを確認するために利用できます。しかし、ハザードマップを見るだけで災害を回避することができるだろうか？　実はそれだけでは不十分です。なぜなら、側溝とか、実際の高低差などの細かい情報が記載されていないからです。

そこで、道路が冠水していることを想定して、ハザードマップ上を実際に歩いてもらい、想像力を働かせて、どんな危険が潜んでいるのかをその場で考え、記録していきます（写真１）。街歩きから戻った後は、危険箇所とその特徴をメモした付箋を地図上に貼っていき、災害危険度マップを完成させます（写真２、写真３）。そして、そのマップを基に、どうしたら安全を確保できるのかを徹底的に話し合い、その成果を発表します（写真４）。

完成した災害危険度マップを確認する際には、学生同士で活発な議論になり、避難ルートを変更すべき、そもそも避難するよりも家にとどまった方が安全ではないか、冠水時に歩くなんて危険すぎるなどの意見が果てしなく出てきます。これは災害図上訓練と言って、災害をイメージして、そこから避難ルートを考えることや、災害時の危険な状況をどのよ

写真１　街歩きを行い、起こり得る危険を想像して記録する

写真２　災害危険度マップに危険箇所とその特徴を書いた付箋を貼る

写真３　完成した災害危険度マップ

写真４　災害危険度マップを基に、安全を確保する方法を発表

うに回避するかを考えることを目的とした訓練です。多くの意見が出ることで地域の災害の危険性を理解できるようになる仕組みになっています。それは、校区や集落単位の地域防災に適用しやすい効果的な取組ですが、地域の隅々まで普及しているとは思えません。従って、学生達には、将来住む地域の防災リーダーとなって、このような訓練を企画して地域の防災に貢献してもらいたいです。

3 最後に

防災には指針はあっても、教科書のように正解がありません。ある災害時には正解だった行動でも、別の災害時には正解とは限りません。災害時には、何が正解なのかわからない状況で、各々が臨機応変に、素早く適切に対応を決めて行動に移すこと、つまり、生き残る確率が高くなる方法を選択することが求められます。

そのような難しい判断ができるようになる第一歩は、自分にゆかりのある地域（自宅、実家、学校の周辺）で、普段の生活の中で得られる地理的な特徴や過去に起こった災害の歴史を知ることです。これは座学では得られない、命を守るための貴重な情報です。その知見があれば、災害の状況を想定することがある程度可能になり、避難行動をイメージしやすくなります。学生達には、集中講義を通して、そのようなことを学んでもらい、将来、家族のため、地域のために役立ててもらいたいと願っています。